

同志社百周年を

迎えるにあたっての

展望 (二)

——出席者——		——司会——	
住	秦	岡	中
谷	奥	本	大
悦	村	清	江
治	龍	一	直
郎	三	(精華短大議長)	吉
(理事長)	(校友会理事)		(本部庶務部長)
		遙	作
		(大阪水上隣保館長)	(大学庶務課長)
		貢	
		(元同志社女子大教授)	
		良	
		(連合父兄会長)	
		喜	
		四	
		村	
		北	
		河	
		中	
		杉	
		田	
		莊	

編集部 この座談会は、同志社が創立九十五周年を迎えた昨春秋、近く百周年を迎えるにあたり、「同志社百周年を迎えるにあたっての展望」というテーマで開かれたもので、先きの、「学園の教育環境」、「同志社の未来像」にひきつづき、本誌第40号に掲載しなかった「同志社教育」の項についてとりあげたものです。

大江 これから座談会をはじめさせていただきます。きょうのテーマは、同志社百周年を迎えるにあたっての展望ということであります。同志社百周年に向かっての展望ではないのであります。同志社百周年を迎えるにあたって、同志社としてどういう希望や夢をもったらいいか、というようなことについてお話を願ったらひじょうに幸いだと思えます。きょうご出席の方は、同志社を愛し、同志社のことは十分ご存じの方ばかりですので、自由に活発なご意見をお聞かせ願いたいと思っております。

まず最初をお願いしておきたいと思えますのは、ご存じのように同志社はキリスト教主

義によつて教育を進めているわけですが、現実におきまして、キリスト教主義の教育も、もう一度反省する時期にきているのじゃないか、あるいは同志社のキリスト教教育はもつと真剣にとりくまなくちゃならない、不徹底である、あるいはまた、昨年、ご存じのように同志社に紛争がありまして、その時点で、同志社がキリスト教の学校であれば、もつとキリスト教主義的な姿勢で学生に対処すべきではなかったか、そういうことが一向にみられないじゃないかというような批判もありました。また紛争の解決につきましても、同志社らしい解決について同志社の人がもつと苦悶をして、とりくむべきじゃないかというご意見もあつたり致しました。そういう意味で、きょうは同志社の教育の問題、あるいはキリスト教主義教育による問題点といったことについて、ご出席の皆さんからご意見を伺いたいと思うわけでございます。まず最初に住谷総長からご発言をお願いいたします。

キリスト教主義教育

住谷 それでは話のきつかけをつくるために、ふだん考えていることの要点を簡単に申

し上げます。

じつはきょうは、さきほど大江さんがおっしゃったように、日頃同志社を愛し、同志社にたいしてご意見をもつておられる先輩の方々においで願つたわけですが、同志社の姿というものは、外部におつてはじめてわかる。私、内部におりますから、ある程度わかりますが、なかなかよくわからんであります。

まず第一に、同志社教育の問題ですが、私は同志社へまいりまして、キリスト教主義教育ということについては、耳にタコができるほど聞いておるわけでありまして、自分も役職がいろいろ考えております。同志社の先輩や先生のなかには、同志社はキリスト教主義に立つておつて、新島先生の精神が基本にあるのであるから、その意味においては、同志社は混乱しても、ほかの学校よりは立ち直るのに都合がよいといつて鞭撻してくれる人があります。同志社のキリスト教主義というもの、これはもうはつきりしているわけでありまして。たとえば「良心を手腕に運用する」ということとか、あるいは大学の入口にある「良心ノ全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」というようなこと、これはいつ

もいわれておりますが、実際にどういうことが手腕を運用することになるのかということになると、それぞれちがつた意見が出てくるわけです。

私は、経済その他社会で中心的に働いている校友の方々から、よく批判されることがある。最近、採用試験をしている先輩の人からいわれたことは、採用試験に來た五、六人の同志社の学生にたいして、きみは同志社の新島先生という人を知っているかといつたら、その学生がそろいもそろつて首をかしげて、同志社の大学には六学部あるけれども、新島先生というのは何学部の先生かよくおぼえておりませんと答えた。じつに驚きいつた話である。いったい住谷はどうしているのかといわれる。私は責任の地位にはおりますけれども、私が教育しているわけではありません。住谷はどんな教育をしているのかといつて詰め寄られても、途方にくれるわけでありまして。またある先輩からは、たびたびの採用試験にあつたて、「良心碑」の文字を満足にいらした学生がほとんどないということで、私は注意されたのでありますが、私がいわれても、どうしようもない。そんなわけで、キリスト教



住谷 悦治氏

主義の学校として、私としては、ひじょうに恥ずかしいことがあるわけであります。

考えてみますと、同志社の香里高等学校、岩倉高等学校、それから女子高等学校あるいは商業高等学校から入る人はひじょうにわずかで、二〇パーセント足らず、八〇パーセント余りの人が試験を受けて外部から入ってくるわけですが、同志社は新島先生の建てた学校だということで、同志社の教育を慕い、あるいは憧れて入ったという人は、とくに戦後最近においては少ないのじゃないか、一般的には普通の大学と同じように、ただ大学を出れば就職ができるという意味で入ってくる人が多いのじゃないかと思えますし、また同志社の学校から入った生徒も、全部がキリスト教の精神を体得したわけでもないし、そのわ

ずかな人々の、ほかの学生にたいする影響力というものは、ごくわずかである。それから学校の教職員においても、キリスト教にひじょうに理解があり、その精神で訓育しようという人は比較的少ないのじゃないか。極端に言えば、現在教職員一千三百人いるとして、そのうち何パーセントが聖書を通読したかというところ、これはわずかだと思いますし、また王子の新島先生の墓へ参ってきた学生はい若くあるかというところ、これもわずかです。教職員においても、若王子へ上がったものが何人あるかというところ、これもひじょうに低いパーセンテージじゃないかと私は思うんです。

そういうことで、そういう形式面からみますと、キリスト教主義教育を看板にしている同志社としては、私は本当に恥ずかしいのじゃないかと思えます。神学部、宗教センターでは一生懸命やっている。毎週講義をして、そのピラが出ており、立看板があります。やっているけれども、集まる人はひじょうに少ないということで、第一、これはどういうところに原因があるかというところを反省しなければならぬ。一般的には、これはキリスト教主義教育が不徹底である。そして、そういう方

面にたいする教職員の熱意が、外部で予想するほど根づいていないということを感じております。それがだいたい同志社のキリスト教主義教育の概観です。それでいいとは思わらん思っておらないわけであります。

それから教育の質的な転換ということ、これはキリスト教もそのなかに入っているわけですが、大学の学生がああいう運動を起しているということは、やはり長いあいだの大学にたいする不信というものがある。この不信の面は、いわゆる理念とか価値観の問題になるんですが、私はごく大ざっぱにいうならば、学生運動の起こるということにたいしては、大学、ことに教育に携わっている人は、学生がいま何を考えているかということとを知らなければならぬと思う。学生には、教育自体に対する不信に大きいものがあり、大学で何を学ぶか、何のために学ぶかということが、やはりいちばん中心にあるように思うんです。それにたいして、いままでは、真理の探究こそが何よりの大学の代いじな問題といわれた。しかし、いま、何のためになると、就職の条件をよくするためということが一般化していると思う。いまの卒業証書と

いうのは、四年間の滞在証書、四年間授業料を納付したという証書、その受取証になっていると思われるようなところがある。私は学生にたいして、卒業証書をもう一ぺん考えろというのでありますが、卒業の意味がはっきりしない。

そういうようなわけで、教育の質的転換という問題については、何を学ぶか、何のために学ぶか、一口にいえば、自分一身の利益と立身出世というような問題ではなく、ほんとに社会のために役立つような勉強をすることが必要じゃないか。そういうところに生きがいを感じるといふ教育がだいじだと思ふ。社会に役立たないような大学のあり方では、これはいままでと同じで、教育は沈滞してしまふしかないと思ひます。開かれた大学ということとは、そういう点と結びつくのじゃないかと思つております。

大ざっぱにそんなことを考えておりまして、われわれはほんとに反省しなければならぬ問題がたくさんあると思つております。

大江　ありがとうございます。住谷総長から同志社のキリスト教の現状であるとか、あるいはまた紛争ののちの教育の問題に関連

して、いろいろお話を願つたのですが、この現状の上に立つて、今後というふうに教育を考えたらいいか、百年を迎えるにあつたての今後の展望が必要だと思ふわけですが、そういう意味で、最近まで同志社にいらつしやうて、また現在教育に携わつておられます岡本さんにひとつ意見を伺いたいと思ひます。

岡本　むづかしい問題であります、私も同志社の中学から学んできたもので、過去の中学生時代の少年期、そして大学生として青年期から壮年期、そういった時代とキリスト教とのかわりあいを一先考えてみますと、ここにおられる中村さんもそうでありまして、ちょうど同志社中学の生徒であつたころは大正デモクラシーの時代でありまして、そのころのことを思い返してみますと、「死線を越えて」を書いた賀川豊彦、「出家とその弟子」の倉田百三、「三太郎の日記」の阿部次郎、また「カインの末裔」を書いた有島武郎、そういった人々から受けたある種の大きな感動と、中学生として同志社にあつた私たちが新島先生に媒介されたキリスト教から受けた感動とが一つにむすびついて、私の同志社中学生としての人間形成の柱になつていた

ように思ふんです。時代がきわめてそうであつたからでもありませんか、私どもも同志社のキリスト教教育の与えたものといへば、比類のない、といつても、ほかの経験がないからわかりませんが、私はたいへんなものだと思つております。ここにおられる中村遙さんは私の先輩であります、中学でいろいろ活躍された。そしてそのころ石井十次、また留岡幸助というような人を尊敬し、そういう空気が同志社中学全体にあつたように思つております。そのころのキリスト教教育というのは、まことに安定的なものでありましてキリスト教だということ、それで問題がいっさい解決されていたように思つています。

ところが、戦争の空白があつて、戦後またふたたび精神の自由をわれわれ日本人が回復したときに、キリスト教はアメリカのリベリズムといつしよになつてひじょうに輝いた時代がありました。しかし、それは一九四五年から十年とはもたなかつたのではないかと思ふんですが、アメリカン・リベリズムとイコールであつたキリスト教、したがつて戦後の同志社におけるキリスト教は、新島先生に媒介されたキリスト教というよりも、アメ



岡本 清一氏

リカに媒介されたキリスト教、それはアメリカの宣教師に媒介されたものでもない、アメリカの政治方針に媒介されたキリスト教といった意味のキリスト教をわれわれはみたのであります。この戦後、同志社が一つのキリスト教主義の学校として注目を浴びたことはやはり事実です。もちろん同志社だけではなくて、ほかの、関西学院にしても、青山学院にしても、立教も同じであります。みんな戦時の、沈滞というか、被圧迫の状態から解放されたわけでありまして。ところがまたその時期が過ぎ去って、いまやキリスト教における一種の長い空白の時代がやってまいりました。それは一九五二、三年ごろからはじまったと思いますが、その空白の状況のなかで、キリスト教は一種の風化をしたような感じがいたします。

したがって、これから将来のキリスト教主義教育というものはどうあるべきかという問題について、おまえはどう考えるのかと問われますと、それにたいしてどう返答していったらいいか、形だけのお返事ならばすぐできるわけがありますが、そうじゃなくて、自ら満足のできるお返事をするようになりますと、それは極めて困難であります。

ところで、今のキリスト教は、ご承知のように、時代が変わり目にあるためでしょうか、一種の教会解体現象を呈しております。それはプロテスタントも、カトリックも同じように、かつての宗教改革時代のような様相を示しております。そこでこのような状況を無視して、同志社におけるキリスト教教育はいかにあるべきか、というように、問題を立てることは、無理な話であります。

ですからこの事実を認め、教会の危機意識を十分もって、そのなかで自分はどう生きていくのか、どのようにすればクリスチャンであることができるのか、どういうふうにすれば、新島先生が解釈されたキリスト教を新しく再解釈していくことができるのかという問題を自分自身の問題としてやはり考えていか

なきゃならないと思います。そうでなければ自分は安心立命ができないことになるわけでありますから、そういうふうに考えて苦悶していかざるをえないわけでありまして。同志社のキリスト教徒がみずからに問いつつ、互いにぶつかり合う必要があらうかと存じます。

そういう状況が大学のなかに起きましたら、ひょっとしたら、このあたりから、現代におけるキリスト教教育のあり方とはこういうものかという解答が得られるかもしれないと思います。

こういうようなことを考えてますと、同志社のキリスト教教育はいかにあるべきかという問題の解答を出すことは無理であって、解答を出さないことがむしろ解答である。回答できないという悩みをうったえることのほうが回答になるような感じがいたしました。大江さんからご指名を受けましても、うまくお答えできないのであります。

大江 どうもありがとうございます。おっしゃるとおりで、解答をお願いするという気持はございません。岡本先生は、キリスト教主義については同志社自身もつと悩み、また個人がいかにこの問題に対処すべきか真剣

に苦悩する、そのなかから新しい解決方法が生まれるだろうというお話で、ごもつともだと思いますが、そういうことも含めて、いま岡本さんからは中学の話がありましたけれども、女子教育の関係で、女子大の先生もしていただいた中村さんからご意見をお聞かせ願いたいと思います。

中村(貢) 女子の問題というふうに限定しないで話をさしてもらいたいと思うんですが、私は同志社中学を出た人間ではなくて、同志社大学へ他の公立学校から入ってきたものであります。そして女子専門学校とか女子大学とかに長いあいだ奉職しておりましたために、そういうところ育の宗教教というものはみてきたわけですが、中学とか高等学校などの宗教教育がどういうふうに行なわれているかということは、あまり自信をもつて申し上げることはできないわけにあります。

私は、同志社の宗教教育として比較的安心しておられる、という点でありますけれども、少なくとも中学校あるいは高等学校の宗教教育については、あまり大きく問題にはされていないように思います。しかし、さきほ

ど岡本さんも言われたわけですが、私たちがいままで中・高はこれでいいだろうだと思っている宗教教育も、これではんといいいのかということ、もう一度高い見地からよく検討してみなきゃならん必要がひじょうにあると思います。

しかし、私が同志社に入りましたのは約五十年近い昔でありまして、その時代に、それでは同志社大学に宗教教育というものがあつたかどうかというふうに考えますと、私は正直にいいますと、その時代に、同志社大学に宗教教育というものがそれほどあつたように思わないのです。同志社の予科の時代に、海老名総長によるいわゆる精神講話というものが一週間に一回ずつありましたが、それに集まるものはごく少数である。そのほかのことをいえば、とくに同志社が意識的に宗教教育をやっているというようには思いませんでした。

ただ、さきほど岡本さんが言われましたように、ちょうどそのころは大正デモクラシーの時代でありまして、キリスト教というものがなにか一つ大きな魅力を社会的にもつていた時代でありますので、そうした影響を大な

り小なり受けてはおつたと思えますけれども、それはけつして同志社の功績ではなくて、やはり一つの時代の影響であると思うのです。だから、少なくとも私の知っている時代からずっと現代までのあいだに、同志社大学の宗教教育が何らかの効果をもつたことがあるかというふうに考えれば、私はあまりもつたようには思わないのです。だから、結局これは古くして同時に新しい問題じゃないかと思うんですが、私の五十年近い長いあいだに、大学において宗教教育はけつして成功していなかったし、また実際的に宗教教育というものがあまり濃厚に行なわれていたように思わない。

それは無理のない話であつて、宗教教育といった場合に、聖書を教えるとか、あるいは礼拝をするとか、そうしたいいわゆる宗教的な行事を学生を対象にしてやるということは、これはむしろ第二義的な問題であつて、いちばん根本の問題は、やはりキリスト教的な学校の経営ということ、それが私はもつと真剣にとりくんで考えなきゃならんことではないかと思う。そういえば、現在そういうことがなされていないというわけではけつしてない

のでありますが、宗教教育というところ、経営者の立場よりも、むしろ入ってくる学生にたいしてどういう教育をしたらよいかということを考えがちであります。私はむしろキリスト教的な学校の経営を、どういうふうになすべきであるか、新島先生が考えておられたのは、結局そういうことではないかと思うのであります。これを学校としてはもう少し具体的にいろいろ考える必要がなからうか。

新島先生は遺言のなかに、学生を丁寧に取り扱えとか、あるいは学校というものはだんだん隆盛になるにしたがつて機械的に流れる風潮があるから、こういうことは大いに戒めるべきことである、というようなことを言っておられます。これは必ずしもキリスト教の精神であるというふうにいわんでもよいかもしれません。キリスト教の精神でなくても、そういうことはありうることであります。しかし、それはやはり新島先生のひじょうに深い信仰から流れ出たところのことばであると私は思います。こういうことは、経営者の立場からいって、もっと真剣に考えて実践すべきことではないか、それを前提条件としてこそ、学生にたいする宗教教育というものが

可能であるのではないかと思うのです。

これはけつして比喩のものにすることはできないと思いますが、学校ではなくて、たとえば病院で、聖路加病院であるとか、あるいは京都でいえばバプテスト病院とか、こういうものはいわゆるキリスト教主義といえないかもしれませんが、キリスト教の精神によって経営されている病院であり、また天理市の天理教の病院、あれは病院といわないで、よろず相談所といっている。私は、よろず相談所というのにはひじょうに深い意味があると思うのであります。ああいう病院のことをいろいろ聞いてみますと、そこにはひじょうにいい設備がある。そしてまたそこにひじょうにいい治療が行なわれている。そのうえにひじょうに優秀な看護婦がおつて、患者をひじょうに親切に見守つていてくれる、ということでありまして、これは私、事実知っているのですが、近江兄弟社が経営しております八幡の近江サナトリウム、あそこに長いあいだ入院しているうちに、洗礼を受けて、クリスチャンになる人が相当たくさんございます。私の知っている人にもそういう人があります。が、これはなにもそこに入った人だけにし

て、必ずしもクリスチャンになれというわけではないけれども、やはりその病院のもっているもの、そうしたものに深い影響を受け、あるいは感化を受けるのだらうと思うんですね。

それと必ずしも同じとはいえないと思いますが、キリスト教的な学校の経営のしかたというのは、やはりこうしたひじょうにいい設備があり、そこにひじょうにいい学問がある。ひじょうにいい教師がおつて、そして学生と教師とのあいだに、ひじょうにいい接触がたえず行なわれているということ、これが一つの先決問題になるのじゃないか。いわば、そこに新島先生の精神を体得した人々によって経営が行なわれ、新島先生の精神がそこに実現されているということが、私は必要じゃないかしらんとおつております。

大江 中村(貢)さんからは、同志社にいい宗教教育が実際に行なわれて、それに影響される効果があったというのには、多少疑問がある。それよりはむしろキリスト教主義によつた学校経営といえますか、運営を一生懸命にやつてもらふことが必要じゃないかとい

うご意見がありました。そういう経営の問題でもありますし、ここには経営者の人もいらつしやいますので、いちばん直接の担当者でもある秦理事長に、キリスト教主義による経営についてのご意見を伺いたいと思います。

秦 いま中村（眞）さんのおっしゃったキリスト教主義による学校の経営ということ、これは同志社の憲法にあるわけでございます。

われわれ経営の一端になっておりますものは、その方向づけでやらなければならんと思いますけれども、ただ残念ながら、世のなかの思想の変化とか、あるいは社会情勢のいろいろな変転から、なかなか思うようにいかない。ただいま岡本さんなりがおっしゃいましたように、最近は教職員のなかにも思想の対立があったり、あるいはまた学生の思想の相にも



中村 眞氏

いろいろなバラエティがあつたりいたしますので、それをひっくり返してキリスト教的に指導していくということは、ひじょうに困難ではないかと思うのでございます。しかし、幸い今年で同志社創立九十五周年を迎えるわけですが、その間の新島先生をはじめ、大先輩方が残されました貴重な足跡があつて、だいたい同志社は、キリスト教の本山ということばが昔からありますように、それには合致しないけれども、キリスト教主義の雰囲気がある日なお学園のなかと、卒業生あるいはまた父兄にまで延長して、あるのではないかと思います。ただ、父兄の方々からいえば、同志社のなかにもっと充実したキリスト教的な教育が流れて、それが如実にみえるようにという大きな期待があると思うんですが、残念ながら、いま岡本さんのおことばのなかにもありましたように、それではこれがキリスト教でございまして、これがキリスト教的な教育でございまして、というようなモデルがないわけでございます。

しかし、考えてみますと、同志社で宣教師の方々、最近ではグイン先生等が同志社のためにつくされ、デントン先生もやはり一生を

同志社のために捧げていただいたわけでありますが、そういう方々が残されたものを考えてみますと、これはなかなかむづかしい評価になったり、あるいは批判になったりするかもしれませんけれども、個々ばらばらになつておつても、その人の人格、その人の信仰、あるいはまたその人の教育の方針で、やはりその一人／＼がよき働きをなしていただいて、同志社の今日になつてゐるのじやないかと思ひます。

ただ、私はここで、幸いきょうこういうような問題がございましたので、経営者側からみて、同志社はキリスト教的な教育方針をどこまで真剣にとりくんで実績をあげておるかということ、もう一べん反省する時期になつておるのではなからうか。幸いきょうは先輩方がおみえになりました、いろいろご意見を伺わしていただくのでございますが、ちょうどいまから約五年前の創立九十周年の記念事業のなかに、精神教育の徹底強化ということとを十の目標の第一に出しておいたのです。ところが、それはまず顧みてほんとに十分ではなかつた。建物は相当建ちました。またいろいろな制度でもできましたけれども、第一番



秦 孝治郎氏

に掲げた精神教育徹底強化ということは、これはおきざりになってしまったということを感じますので、せめて百周年に向かってこの問題をもう一べん反芻いたしまして、なんらかの方向づけをしていきたいと、かように思うわけでございます。

大江 どうもありがとうございます。それでは、ご令息なりお嬢さんを同志社へ入学させておられます、また父兄会の立場から、同志社の教育、またキリスト教教育のあり方とか、そういう問題についてのご意見なり、ご批判なり、またこういうことが望ましいというような希望を述べていただいたらどうかと思いますので、河北さんにひとつお願いしたいと思います。

河北 同志社教育ということにつきまし

て、キリスト教主義の教育というふうに書かれておりますが、キリスト教主義ということでございますと、同志社も、たとえば関西学院、青山学院、明治学院でもみな同じキリスト教主義です。私はやはり同志社というものの特異性を考えなければならんと思います。というのは、さきほど岡本先生がおっしゃったように、キリスト教主義による学校というよりも、新島先生を媒介としたところのキリスト教主義学校といえ、はつきりしてくるのではないかと思います。そういう意味から、同志社教育というものをもう一度探究してみる必要があると思います。

それと、このごろの同志社をみておりますと、失礼かもしれませんが、リーダーシップがないのじゃないか。リーダーシップを発揮する場所あるいは人はどこなのでしょう。組織的にみれば、総長とかあるいは理事長とかであるかもしれませんが、このような問題もこのさい十分考えてみる必要があるのじゃないかと思います。

それと、神学部の問題が問われていると思います。さきほど岡本先生も教会の意義について多少論議されておりますが、教会におい

ては、いま牧師、信徒が歓迎するような――歓迎ということばの内容においていろいろ問題があるかもしれませんが、神学生が出てこない。いわゆる神学部を卒業した人を招聘したいということがひじょうに少ないわけですね。これは事実なんです。信徒あるいは牧師が悪いのか、これは別の話ですが、現実には同志社の神学部を出た人を歓迎しない空気があります。教団でも、教区でも歓迎しないという空気がひじょうに強いと思います。

これはやはり神学部としても考えていただかねばならない問題と存じます。次に最近の同志社は、就職ということからいえば、上位クラスですね。一流会社が待っているという状態でありますが、それにあぐらをかいていることがないでしょうか。

そして、これはことしの特色ですが、父兄会の懇談会で各地をまわりますが、一年生はひじょうによく勉強する、とくに出席率も、部によって多少ちがうかもしれないが、大変よいというふうに聞いております。とくに文学部の心理学科なんかは、出席率九八パーセントということ聞いて、ちょっとびっくりしたんです。こういうことは会社でもない

です。しかも心理学科なんかでは、ほとんどの父兄、生徒が、なんとかして大学院へ入る道はありませんかと、そのことを一年生から問題にしている。そういう傾向です。これからの大学の使命とは何であるかということの問題になってまいります。就職ということが主体なのか、学問が主体なのか、あるいはまた大学院教育という問題もありますが、私はいまここでそれを追求しようとは思っておりませんが、そういう問題点があるということとを申し上げて、いちおう私の責めを終わりたいと思います。まとまっておりませんけれども……。

大江 どうもありがとうございます。神学校の問題が出たり、またキリスト教の問題が出ておりますが、中村遙さんは、この方面



河北 喜四良氏

での長い経験をおもちになり、また現実にいるお仕事をやっていらっしゃる、そういう立場からご意見をお伺いしたいと思います。

中村(遙) ちょっと耳の痛いお話が出ておりますが(笑)、なるほど一々ごもっともなお話ばかりだと思っております。同志社でキリスト教教育をやった、ただし、それはあまり効果があつたような気がせんというお話がさつきあつたんですが、はたしてそうなのか。私はじつは同志社にきたからキリスト教になったのであります。だから、私自身から考えれば、効果がなかったら、キリスト教徒にならなかつたはずなんです。だから、大いに効果があつたと私は信じております。ところが、その源流が神学校かどうかということになれば、必ずしもそうは感じていないのであります。

また同志社のビュリタニズムというものは、悩んでいるということを感じています。勿論このことは同志社だけではなくて、アメリカでもそうだと思いますが、いいこともアメリカから教えてもらったが、また悪いことも、最近アメリカの宣教師の影響を受け

ているという気がするんです。したがって、そういう点になると、神学校の先生は、とくにひじょうにつらい立場に立っていると思います。

また将来は、国際的にも「社会の福祉」ということが中心課題になるのじゃないか、従って、そのためにどれだけ貢献ができるか、あるいはまたそれに貢献をするような考え方を、同志社のなかで、ただ植えていくことができるか、こういうことがひじょうに重大な課題になると思います。

それについて学校の姿勢、同志社の姿勢がはたしてどうなっているのだろうか。

新島先生の「同志社大学設立の旨意」を読んでみますと、これは有名なものですが、「一国を維持するは決して二、三英雄の力に非ず、実に一国を組織する教養あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、是等の人民は一国の良心とも謂ふ可き人々なり」と、同志社はそういう良心的な、しかも世のなかに貢献をする人々は、ただ金持になるとか、あるいは有名になるというような人間を養成することとはちがうと、はっきり新島先生はおっしゃっている。



中村 達氏

また同じキリスト教の学校でも、同志社は他の学校よりも、家柄がだいぶんちがうと思うんです。私は関西学院の講師をしていましたが、同志社と関西学院では、同じキリスト教でも多少ちがう。学生自身も、だいぶん同志社の方が家柄がいいぞと（笑）関西学院でいったんです。同志社では裏表ということはあるべきじゃない、正しいことはどこまでも正しいし、正しからざることをすべからず。ところが、関西学院は、裏表というものはあるものだ、あるのが当然だと考える。同志社はそのころ禁酒禁煙でした。いまはどうもそうじゃないらしいが。関西学院もキリスト教だから、禁酒禁煙でした。しかし学校のなかでは酒も飲まんし、たばこもすわん。けれども学校を出たら飲んでかまわん。し

たがって、昼の休みの時間にでも、学校の校門を出て、喫茶店へ入れば、先生も飲んでゐるし、学生も飲んでゐる。なるほど関西学院はこれで議論なしに無事にいきよると思つた。ところが、同志社はそうはいかんから、多少のトラブルもある。ただし、そこに同志社の良心的なものがあつたと思う。やはり同志社は家柄がちがうということを大いに自覚しなければならぬと思います。なぜちがうかといつたら、やはり新島先生が立てられた、ニューリタンの同志社だからである。

したがって、新島先生は何を考えていらつちやつたかということをおもうべきではないでしょうか。特に創立百年を迎えようとしている今日、創立時代の精神に帰ることが必要だと思ひます。

また、同志社教育の徹底を期するように、責任の果たせるような理事会、同志社の責任者としての役目を果たせるような体制をつくつていただくということについて、この時点で考えていかなければならぬという気がするんです。ちよつといいすぎたかもしれませんが、お許しを願ひたいと思ひます。

大江 つづいて奥村さんにお願ひしたいん

ですが、中村（達）さんから同志社と関西学院の比較がありまして、同じキリスト教主義でも、両方の学校のカラーがちがう。また同志社と関西学院のいろいろとちがう点のお話もありまして、ひじょうに興味深く伺つたのですが、それと同時に理事会がもつと強化されて、責任をもつて学校の運営にあたり、理事会が中心になつて同志社を充実発展させるべきだというご意見が出たと思うんです。奥村さんは同志社で長いあいだ理事もやつていただくし、総務部長もやつていただいて、その後同志社を外からながめられて、いまいった教育の問題とか、同志社の内部の問題について、どういふふうな印象をもつておられるか、どういふふうな形で充実発展させたいか、そういう夢というか、希望を語つていただいたら非常に結構だと思いますが。

奥村 ご承知の松下さんの「PHP」がこのごろひじょうに売れている。こんどは英文が出て、すぐ売り切れですね。いま百五十万、もうすぐ二百万になるといふ。編集がうまくいけば、三百万はだいじょうぶだと、こういう勢いです。これの編集をしているのは、同志社の心理学を出た大庭君です。それでこの

あいだ大庭君を訪問しまして、編集の方針はどうしているか。ちょうど岡本さんがおっしゃった問題です。何を与えようか、何を教えようか、そういう頭で編集をするのではなく、編集員（十人くらい、まだ若い人らしいですが）の人たちが寄って、どういう問題を各自が心にもっているか、何が知りたいか、その問題を出し合おうということが、朝から晩までの編集会議の主題だそうです。いま岡本さんのおっしゃったように、われわれキリスト教のなかに入っているものは、どういう問題意識をもっているかということが大切だと思わうんですがね。同志社の先生たちが、みな自分の悩みは何かということから出発すれば、解決までいかなくても、解決する方針がみえるのじゃないかと思うわけです。



奥村 龍三氏

じつさい、今日の同志社の当局にたいしては、ひじょうに同情しますわ(笑)。ことに秦さんの忍耐力。毎年赤字でしょう。授業料は上げられないでしょう。そして教職員は、公務員がどうだこうだといってくる。赤字をそう何年も続けられない。もう三年、四年授業料を上げないで、教職員の要求を聞いたら、このままでやっていけない。じつにせっぱつまった問題になっていらっしやる。そして創立百年のお祝いが来ている。この時代になんとかしなければならんというひじょうにせっぱつまったお気持ちで、私など招かれて意見をいえるということで、ほんとにご同情申し上げる次第です。ほかの方々がおっしゃったように、いまの日本の青年というのは、とにかく私立、公立、国立の学校の先生の八割五分までが日教組の洗礼を受けたような連中ですが、それが教えるような教育を受けているんですから、ある意味において、そういう色のついた青年をどういふふうに教育していくかということは、これは並たいていじゃないと思うんです。岡本さんのおっしゃったように、同志社の神学部をはじめとしてクリスチャンが、自分でどういう問題を問題にしてい

くか、キリスト教の信仰とは何ぞやというところからなにか火花が散ってきて、同志社の行く道はこうでなければならんという意見があるのじゃないかしらんと思うのです。これは簡単な問題じゃないんですからね。一人一人がやはり問題意識をもたなければ、ちょっとした集会をして、それでキリスト教の教育ができたというような問題ではないんですから。

おとつ、私は徳富先生の展覧会をみにいって感じたことは、徳富先生がいよいよ「国民の友」を発刊するとき、この「国民の友」はこういう方針でいくという四つの綱領を掲げていらっしやる。それは政治の改良、社会の改良、文化の改良、宗教の改良、この四つを主眼にして「国民の友」を発行するんだといっているらっしやる。同志社は百年を迎えて、これからはこういうことでいくんだという、なにか中心課題が総長はじめ先生たちから生まれてきて、そうたくさん並べる必要はない、なにか中心的なものを示されることが必要じゃないかと思うんです。さきほど総長がおっしゃった社会に役立つ人間をつくりたいということ、これはじつに大切な問題だと思わん



大江 直吉氏

ですね。個人の名誉、富貴を願っているような教育ではない。同志社の教育は社会をよくする、社会のために働く人間をつくる。ほかのことは、同志社は他の学校に比べて劣るかもしれないけれども、社会をよくするということが根本になって働く人間をつくる、そういうことが同志社教育の大方針となることが願わしいと思うんです。

ロータリーの雑誌を読んでいたら、こんなおもしろい話を書いてありました。インソップ物語みたいなものですが、ある日曜日に豚と鶏がまちを散歩した。教会の前を通ったところが、きょうの説教の題は、「いかにして貧しき人を助けうるか」ハウ・キャン・ウィ・ヘルプ・ザ・プアーということである。鶏がそれを見て、「おい、プーちゃん、こんな説

教をするそうだ。われわれもひとつ貧しい人を助けようじゃないか。なにか方法があるか。」そうすると豚が「そうだな、何かしたもののだが。」そこで鶏が先手を打って、「いいじゃないか、ハムエッグスをつくって貧乏人に配ろうじゃないか。」そうすると豚も、「それはいい。ハムエッグスをつくろう。」しかし次の瞬間、「ちよつと待て。おまえはお尻から出る卵を寄付、すなわち、コントリビュートすればいいだろう。けれども、おれは命をコミットしなければならんから、それは待てくれ。」こういう一口話がロータリーの雑誌に出ておった。これはひじょうにおもしろい話だと思います。同志社の教育は、生涯かけて世のために働くことにコミットする人間をつくる。大きな金をもうけて、あり

余った金のなかからチビリチビリ出して、それで社会奉仕ができたというのがロータリーのあり方かもしれないけれども、そういうあり余ったなかからチビリ出して、寄付しましたというような、そんなコントリビューションじゃない。生涯かけてこの諸問題にとりくむようないわゆる「丈夫」のおこり来たらんことを」と、新島先生はおっしゃっているん

じゃないかしらんと思うのです。

岡本 おもしろいお話ですね。コミットとコントリビューションですか。(笑)

奥村 いろいろ申し上げたいのですが、それだけ申し上げておきます。

大江 教育の問題について皆さんからいろいろ伺い、またひじょうに多彩なご意見をいただき、どうもありがとうございます。

